

## 東京外大の日本史

東京外国語大学では、2015年度入試から二次試験の地歴科目において日本史を選択できるようになった。過去5回の実施からわかることがある。世界史と同様に大問2題で100点満点であるが、第1問と第2問に20点の400字と10点の100字の論述問題があり、それと各5点の短答問題14問から構成されている。長文の史料や参考文献を読んで答えるが、短答問題は私立文系の難易度とほぼ同様な基本問題であり、難問ではない。近現代史と前近代史からなり、400字の論述は近現代史にかかわる問題が中心であるが、2018年度はキリスト教伝来に関する問題であった。また、長文の史料は一応読む必要があるが、設問には詳しい説明があるので問題文を読まなくとも解けるので、論述に費やす時間を確保するためにも、短時間で大雑把に理解できる読み方の訓練も必要であろう。論述は指定語句を用いて答える形式なので、ポイントを外さないで書けばある程度の点数は獲得できるが、400字の論述は長期間のことをまとめるので、どのことを取り上げて書くかで迷うのではないかと考えられる。ただし、2020年度の400字論述では、アジア・太平洋戦争について日米の正当性の論理を問うものであり、文中の語句からヒントを読まねばならず、また、従来のように時間的な経緯を書く問題ではなかった。100字の論述の設問は抽象的なことを答えるに要求しているのだから、受験生にとって適切な答えを書くのは困難であるかと思われる。ただし、2017年度の100字論述では具体的な内容を書くことが求められた。2018年度は再び抽象的なことが求められ、同時に史料文を理解することが求められた。その理解に沿って答えを書くが、大学側が発表した解答例は史料に沿った答えではなかった。史料を理解していないのか、受験生に正しい答えを求めているのか、どちらかである。例年、大学から発表された解答例を見ると、事実が羅列されているだけのことが多く、受験生に多くを望んでいないのではないかと思われる。大学側が公表している「講評・解説」によると、「基本的な知識を問う」とあり、中堅私大レベルの問題を解いておく必要がある。

なお、来春の入試について、新型コロナに関連し、大学側は受験生の学習範囲を考慮して、「基本」を問うと発表した。従来も基本題なので、やや難問の2問ぐらいが基本に置き換わると思われるが、大きな変化はないと思われる。

過去5回の実際の入試問題は400字と100字の論述問題であった。ただし、2018年度は世界史で600字論述が出題されており、日本史でもその可能性がある。本テキストの論述問題を練習し組み合わせれば書けるだろう。論述の字数に関しては、世界史でかつて150字が出題されたこともあり、100字、200字、300字、400字の論述を練習しておくのがよい。出題範囲は世界史に準じるとのことであったが、2015年度は中世史と近代史であった。世界史が近世史以降の出題であったので、日本史も近世史以降が出題されると予想したが、予想が外れた。それ以後は近世史と近代史であった。近代史は本テキストに収められている

練習問題や入試直前のテストゼミで取り上げた問題に重なっていた。2017年度はワシントン会議後の国際協調に関する問題文であったが、論述は重工業の発展にかかわる出題であった。近世史は間引と松平定信の江戸における飢饉対策であった。2016年度は幕末と近代史からの出題であった。2015年度は2問とも外交史であったが、2016年度は外交史と政治史(婦人参政権の歴史)となり、2018年度は再び2問とも外交史となった。

今後は、外交史を中心としながらも、政治・経済・文化の分野からの出題も予想される。また、近世・近代史を中心としながら、中世史からの出題も考えられる。

なお、2016年度の第1問は山川菊栄の文章を用いた婦人参政権に関する出題であったが、冬期講習の講座では市川房枝を通じた婦人参政権の文章を解いた。その文章を参考にする、第1問の400字論述は十分に解ける。過去問を解くときも出題の文章をじっくり読んで理解しておくといよい。

2017年度の400字論述は、明治時代から大正時代にかけての鉄鋼業にかかわる出題であるが、アメリカと関係させて書かせており、受験生は戸惑ったのではないかと思う。経済・政治・文化を外交との視点から見ることが要求されるのだろう。

2018年度の400字論述は、キリスト教の伝来からバテレン追放令までの宣教師の動向と織豊政権によるキリシタン対策について論述するものであり、字数は長いが比較的書き易い。本テキストの200字論述の2に類似する。100字論述は抽象的な内容を書くことが多いが、朝鮮政府が維新政府の成立と廃藩置県との連絡を受け取らなかった理由を史料に沿いながら指定語句を使用して書く問題であった。「朝貢」と「天皇」の使い方に戸惑ったであろう。ただし、その直前の文章を読むと手懸りがあり、読解力があれば書けたのではないかと思うが、ほとんどの受験生は書けなかったのではないかと想像する。

2019年度の論述は大きく変化した。400字論述は、日本・アメリカと中国との国交樹立や台湾との国交断絶を、中ソ対立をふまえて書くものであり、日本史選択の受験生には中ソ対立についての知識がなかったであろう。また、100字論述は、日露和親条約をクリミア戦争という世界情勢をふまえて位置づけるものであり、これも困難であっただろう。2022年度から始まる「歴史総合」は、世界史と日本史を統合した視点で近現代史を学ぶものであり、今年度の論述はその先駆といえよう。今後もこのような出題形式が予想される。

2020年度の400字論述は大きく変化した。従来は時間的な経緯を順番に書けばよかったが、日米間の戦争の正当性の論理を問うものであり、史料に正当化の論理が述べてあるので、順番に読んでまとめるのであればある程度は書ける。戦争観という個人の思想にかかわる設問であるが、思想性を問われることはない。大学側の発表した解答のように客観的に書くことも可能だが、日本が主張する「自存自衛」や「聖戦」の論理について、ライシャワーが特に「聖戦」の欺瞞を批判しているように、事実に基づいて論理の矛盾に触れてもよい。また、アメリカ側の原爆投下の正当化などは別としても、ライシャワーの提案にも民族対立を煽るような認識があるのでそのことを批判的に読み取ってもよいだろう。100字

論述は、時間的な変遷を書く問題なので、感染症についての知識がなくとも史料を理解すれば書けるであろう。

大学側の「講評・解説」は、東アジアをはじめとする「世界の中の日本」を歴史的視点から現代世界が抱える諸問題について考える態度を養うことを教育目標としていると述べている。今年度はその特色が大きく出た。近世史でいえば、南蛮人の来航、朝鮮出兵、海禁政策、列強の接近、開国などを、文化史や経済史と結び付けて論述の練習をしておく必要がある。近現代史では、さまざまな分野で世界との関連で論述することに留意しよう。

そこで、入試対策として、本年度の入試問題と過去問と大学が公表しているサンプル問題の解答を収録し、解説を付けるとともに、模擬試験問題と解答・解説を載せた。また論述対策として、100字、200字、400字の問題と解答例を載せた。論述問題は訓練が必要であり、一朝一夕には得点できないので、とにかく書いてみることでポイントを押さえることはできるようになるだろう。また、400字の論述でも100字や200字の論述を組み合わせれば書けることもあるので、訓練をして長文も書けるようにしてほしい。

合格点は、短答問題が簡単なので60点台後半と考えられるが、センター試験レベルでは解けないので、私大の日本史も解いておくことが必要だろう。論述は受験生が満点を取るとは困難なので、短答問題の取りこぼしは致命的になる。疎かに考えてはいけない。また、論述も部分点で得点を重ねると合格に限りなく近づく。